<table>
<thead>
<tr>
<th>関西大学学術リポジトリ</th>
</tr>
</thead>
</table>

タイトル: ラーベと環境問題
著者: 論文
雑誌名: 関西大学外国語教育研究
巻: 9
ページ: 21-31
発行年: 2005-03
URL: http://hdl.handle.net/10112/1477
研究論文

W・ラーベと環境問題
— ラーベ研究余滴 —

W. Raabe und Umweltprobleme
— eine zusätzliche Raabe-Studie —

諸 沢 厳
MOROSAWA Iwao

外国語（ドイツ語）要旨:

Wilhelm Raabe hat schon über 100 Jahre früher die drohende ökologische Katastrophe deutlich erkannt und als Menetekel in seiner eigenen Art niedergeschrieben. Sein Werk enthält nählich eine Fülle der Passagen, die grundsätzlich die erst heute global bewußt und politisch sogar brisant gewordenen Forderungen in Sachen Umweltschutz artikulieren.


キーワード（日本語）:
ヴァルヘルム・ラーベ、産業革命、環境の急変、生態学的警告、ラーベの現代性

キーワード（英語）:
Wilhelm Raabe, the industrial revolution, environmental changes, ecological warnings, actuality of Raabe

19世紀ドイツ写実主義作家ヴィルヘルム・ラーベ（Wilhelm Raabe, 1831～1910）の作品を通読するとき、この作家が今日全世界的になっている環境破壊の危険性の問題を1世紀以上も前に既にはっきりと認め、迫り来る災禍の予告として独自に書き表してことが分かるのである。
つまりラーベの作品には長短の差こそあれ全体として観れば現代の環境ないし生態学的な諸要求を基本的に表明している一節が多く含まれており、それらは1980年代になってようやく一般的に意識され、政治や行政面の一連の施策を生み出させ、今日のドイツをして「環境先進国」1）にまでならしめた「環境保全」問題の諸要請をまさに古典的にまた文学的に裏付け得るものであると言って差支えなかろうと思われるのである。

文学においてこの環境破壊の現象を詳しく取り上げたものはこれまでほとんどなかった。それはこのテーマが最近にいたるまで文学として看過されていたことを、そして産業もしくは工業化の波に懸念の念を抱いていたのはごく僅かなアウトサイダー的な存在だけでしかなかったことを意味しているであろうし、また「環境保護」という概念が一般的に定着したのはこの四半世紀前からではないことから、この作家がこの点でも19世紀後半の「進歩」を讃歌する楽観的な時代精神を越えていたことを示しているであろうし、広く知られている小説家H．ヘッセ（Hermann Hesse, 1877～1962）の「恐らく後世のドイツで認められるであろう」2）という言葉を想い起し得ることもできる。また一方で20世紀後半に始まった再評価は「ラーベの物語芸術が19世紀後半の最も重要な文学表現の一つであることが益々明瞭になってきた」3）とのH．ヘルマースがその成果の一端を表しているように元来言わされてきた「詩的写実主義」なる枠を越えて現代にも十分通じ得る普遍的な独自性を明らかにするに足る専門的なテーマを追求してきたが、環境破壊の問題に関しては文芸学外の問題をも含むことからかまだ取り扱われていないと見受けられるのである。小論は読者に背を向けられていた中期（1867～70）以後の作品の２、３例を主に取り上げながらラーベが現今の時事問題との関連からも読まれ得る作家であることを指摘しようとするものである。

（1）

ヴィルヘルム・ラーベはエッシャースハウゼン（Eschershausen）、ホルツミンデン（Holzminden）、シュッタートオルデンドルフ（Stadtholzendorf）というヴェーザー川（die Weser）を西に望む丘陵地帯の牧歌的な「古国」たる小さな町で育ち、1854年に始まる作家生活のほとんどをベルリン（Berlin, 1854～56）、シュッツルガルト（Stuttgart, 1862～70）そしてブラウンシュヴァイク（Braunschweig, 1870～1910）という大都市で送るのであるが、その間これら大都市でドイツのいわゆる「産業革命」を直接体験する。目的当たりにすることはドイツが千年に及ぶこれまでの農耕社会を脱して産業もしくは工業社会へ変貌してゆく姿であり、大衆社会、消費社会での変化の過程である。ドイツは後進国であっただけにその過程はなおさら急激なものがあった。かくてラーベははじめて詩人としてこの根本的な変革の結果と個人の生活へのその影響を考えるようになる。これはまさに現代文学にとってははじめて見出されたと思われるテーマであろう。時をほぼ同じくしてとくにK．マルクス（Karl Marx, 1818～83）とF．エ
W・ラーベと環境問題（諸説）

ンゲルス（Friedrich Engels, 1820-95）がこの産業革命進行過程に随伴して生ずるさまざまな衝撃的事象を哲学的に解明し、政治観念の形での表明を試みだが、ラーベもすでに急激に生じてきたいわゆる「無産階級」が「下からの」社会変革の原動力となる可能性を認めていた。しかし、マルクスやエンゲルスとの相違は人間を単純に階級にわけることを拒んでいること、むしろ各人は唯一無二の個人と見ていることにある。それは「至るところで定規を当てる者に災いあれ」という脅者が意味するところや描かれる主人公が主に独立独歩の、あるいはそういう運命を辿らざるをえない個人またはときとして変わり者であること、また対象とされているいわゆるAdressatも個人であることからも理解されることである。発生する大都市、産業の中心地へと流入する人々、またその人々で編成される「プロレタリアート」が益々貧窮化してゆくのを見てラーベはすでに初期の小説「ある春」（Ein Frühling, 1857）で上記の可能性を3度目の「ノアの洪水」に譬えて次のように予言したのであった。

「2度の洪水を人類は経験したが、3度目のもののが差し迫っている。最初の洪水はすべての民族の古文書が伝えている。つまり自然の荒々しい力が若い人類とその文化を打ち破ったのだ。第2のものは歴史が民族の大移動を呼んでいる。そして第3のものは？それがやって来るのだ、やって来るのだ。目を覚ますがいい、目を覚ますがいい！祈るがいい、祈るがいい！神の霊が水面を覆うようにと。」

ラーベはすでに処女作「雀横丁年代記」（Chronik der Sperlingsgasse, 1854）でいわゆる農村離脱（Landflucht）にも言及しているがシュッツガルト時代以後の一連の作品にはそれとも関連して常に拡大してゆく諸都市の、いわば今日でいうスラム街の社会的窮状が多々描かれており、まさに未曾有の社会現象としての大都市の発生が繰り返し小説の背景をなしているのである。古い都市の周辺に限らず中心部の周囲にも簡単な建築法で戦風景なアパートや工場用の建物が次々と出現しゆく様相はこの作家が上記大都市で実際に目に留めたことそのものであろう。つまり益々周辺地域を侵食してゆく都市の外縁を描くとともに、「この取り壊されると見えたが、もう建てたばかりとなっている家並みの砂漠」という表現で容赦のない破壊が数世紀前から有機的に年せんしてきた旧市街ないしは中心街にあっても止まらない急激な発展を的確に示しているのであり、これがラーベをして小説『巨匠アウトール』（Meister Autor, 1874）では「われわれのドイツの町中年の路地では皆が好き勝手なことをしている！」と叫ばせるのである。

この作品ではとくに「優先道路」（Prioritätengasse）と名付けられたものを設けるために中世の貴重な建物が取り壊され、付属の古い公園の樹木が伐採されることになるのであるが、町の道路建設局の役人はその意図を次のように述べる。
われわれがこれほど整地測量に骨の折れたことはなかったよ。しかし、それだけに新規に計画された道路施設の形でそれが完成したら町の人々をこれほど驚かせ、喜ばせるものははないだろうよ。あのガタガタの町隅隈の後側の水路は勿論埋め立てぬ。あそこにはまだ古臭い慈善団体のオンボロ養老院があるが、これも無論片付けなきゃならないね。あそここの婆さんたちは町の門の先の体にも良い本当に牧歌的な地帯へ移ってもらうさ。そうすればこの町の中心点から一直線に駅へ行くのさ。今この時間にこの周りのガラクタの中にある奴は誰もそれに気づいていないのがね。」

一見して当然とも思えるこの言葉が他のことに配慮する事なく計画された新規事業の実現という目的にのみに醉いしつけられたこの役人の自己満足の吐露であるのをルーペは勿論独特の反語で言い表しているのであり、それはさらにこれに続いて添えられている次の対話が明らかにしている。

「まさにそうですね。」と私は極度に感激して叫んだ。「全く喜ばしいことですね」と。
「しかもこれは商業投機の奇跡ばかりじゃないんです。現代の建築学の奇跡でもあるんです。」と親切な情報提供者は大声で言い、私の感動を自分のもの以上に高めたのだ。
「ここでわれわれがどんなことをを目論んでいるのか、お分かりにはならんでしょう。」
「そんなことはありませんよ」と私は胸の奥底から呼くように言った。「私にははっきり想像できますよ。つまり、実際今周りに見えているものが何もかもなくなってしまうんでしょう。」
「何もかもね。」とさらに力をこめて私の有頂天になって、興奮した建築士は答えた。「今やニュルンベルク（Nürnberg）の町も取り壊され始めただんですよ。だから、われわれがまさにこんなによく保存されている廃墟をどうして今まで以上に大きく取り扱わなければならぬのか少しも合点がいかんのですね。」

伝統と景観の象徴であるニュルンベルクが持ち出され、資本主義と自然科学との内の結合を軸に進歩の名のもとに際限なく荒々しく発展する近代都市に批判の矢が向けられていることは明らかであるが、ここではまだ表立っては狭い意味での環境保全の問題が提示されてはいないと解されるかもしれない。しかし市民や政治家までが交通地獄のための高速道路やバイパスあるいは交差路やロータリーの新設または増設のすべてが必ずしも幸福を喰う施策ではないと気づくのはルーペがそれにも通底する警告を発してからまる1世紀も経てからであることが認識されるべきであろう。その間にどれだけの建物や平地が進歩ということの犠牲になったかを想像させるものとして『プフィスターの水車小屋』（Pfisters Mühle, 1884）の中で都市設計者たちの
W・ラーベと環境問題（諸沢）

食欲な要望に抵抗して不気味な緊張感を漂わせて存続している教会墓地の例が挙げられよう。

「一つの墓地があるのだ。あの目立つ都市ベルリンの中心ではないんだが、ある郊外にある町の一つの真っ只中にあり、しかも非常に古いものの一つではない。緑の敷と樹木が豊かな場所で、4辺形をなし、新しい非常に現代風の建築に囲まれており、実際にはまだ実行されていないが、理論上では都市計画の設計図上にもうしっかりと敷かれた道路線に総横に横切られているのだ。」[11]

つまり、『巨匠アクトール』の物語やで下水路とガス管のある新しい道路に取って替わらればならぬ運命の詩に冨んだ庭園とは逆に、計画された道路建設の実現がこの場合はなお30年間延ばしのままになっているのである。語り手の義父がその墓地に埋葬される権利証明書を手に入れているからにかなかないと説明されているのであるが、その猶予期間は1世紀の年月に過ぎない。

「わしがまだここに埋葬される権利があり、あの進歩主義者ともにわしの死後なお30年の間腹立たしい思いをさせることができるとこの権利書には書いてあるわけさ。」[12]

（2）

これまで変貌しつつある諸都市の描写の一面を例として引用したが、これらが環境保全問題を明瞭に表明してくるのはラーベがこの急激な発展が続く中での生態系の変化を述べる場合である。絶筆となった小説『アルタースハウス』（Altershausen, 1900）では町の緑地帯で小動物の姿が消え去った様子が公園管理人の口を借りて医事顧問官たる主人公に向かい次のように説明されている。

「そうなんです、顧問官先生、これは今のこの町の状況のせいなんです。今ここでは小鳥や、蝶や毛虫や甲虫やその他の…卵や麺から生まれてきて多い回り、飼を渇り、飛び回ったり動き回ったり、悪さですらすら生き物はみんなそうです。これらの生き物たちは今の人間が昼間や夜間の快適に過ごすために必要としている幾つかのことにはや我慢がならないんです。 […] 私たちにはお医者さんがなくても、この生き物たちにはそれを喫き付けることができてあちこち去って行ってしまうんですよ。この町の上空のずっと高いところできさえそんなふうになっているのです。顧問官先生、私も老人となりましたが、もうずっと前からここにだけいたコクマルクラスのことを思い出さざるを得ないんです。 […] 私たちのにおいはあいつらにはもう快いものではないんです。しか
も私たちは夜にはガスや電気の光やその他のこの種のあらゆる発明品で明るい朝となるまであいつから眠りと夜の安らぎを奪ってしまったんです。私たちの町では夜にはもう眠りの時間がなくなっていることが、あいつらを毎日のように屋根や塔から追い払ってしまうんです。臭気が甲虫や毛虫や蝶たちをこの茂みや他の園芸物から追い出したように。ずっと向こうの郊外の町では勿論まだ生き延びているでしょうが、あんな所にもまたまた煙突や空気が対して工場がやって来て生き延びようとする気持ちに嘔吐を催させててしまうんです。だからあいつらにはもう恐らく何にも残されてはいないんですよ。[12]

今日もなお上記ラーベのこの警告は真実しきいほどの現実性を伴って伝わるであろうが100年も前にこの深刻な現実を理解できたのはごく僅かな人たちだけであったろう。しかしながらまだ一方でこの作家が繰り返し取り扱った問題を独自に異化して持ち出して来るもののみに注目してはならないであろう。かかる場合に動物相や植物相そのものだけに関心が示されてるのではなく、これらが人間の置かれている状態を象徴化していることが重要なのであり、結果は生存を脅かす技術が増大することによって人間にふさわしい在り方が破壊されるということが反論的に斜髪されているのである。それは上掲の引用に続いて「動物たちはほんの少し人間の先を行っているに過ぎないのです」という言葉に如実に発揮されているよう。

ラーベは産業革命の大都市における随伴現象をたる諸変化を述べているばかりではない。地方都市やいわゆる田園地帯におけるそれらをも描き出しているのである。それは大都市から離れられた地域の工場が所在地を選定した結果であったり、大衆社会の出現過程で大衆観光が次第に生じてきた結果であったし、数世紀にわたって維持されて来た居住環境を越えて居住域が次々と造成され始めていた事実の反映に外ならない。大衆観光を映し出している例として1888年に書かれた物語「皇女フィッシュ」（Prinzessin Fisch）が挙げられるよう。この作品ではハールツ（Harz）地方のある小さな町「イルメンタル」（Ilmenthal）が19世紀後半に数多く見受けられたように保養地に変貌してゆく有り様が描かれているのであるが、それまで野生の草花や良い匂いのする薬草が生い茂っていた町中や周辺部のいだところに「イタリア — ドイツ — イギリス風ルネッサンス様式の邸宅」が観光用の呼び物とともに建て並ぶようになる。この一般的な建築ブームの助成者はアメリカから戻ってきたアレックス・ロートブルク（Alex Rotburg）という男で、理論「概して関心を持たず、生むが愛国的なイルメンタルの町の出身者でもなく」[13]、ただ利己的な利益志向からそうなったのであったが、それでも目を眩らさされた住民たちは町の景観を最終的には破りてしまうこの男のすべての計画に感激して同意し、たとえば周囲の自然をも含めた彼の提案を次のように歓迎する。

「ロートブルクさん、どうか遠慮なく言って下さいな、ホルツヴァッサー（Holzwasser）やフンメルバッハ（Hummelbach）の渓谷の水を堰止め、ウルバーンシュタイン
（Urbanstein）の村経由で引いてきてよその土地からやってきた人々のために涸れない渓を造るというあなたの考えは誰でも納得できるに違いありませんよ。あなたがこの件を引き受けて下されば役場の美化委員会必要的補助を欠かせやしないと思いますよ。かく言う私でさえしかるべき臨時のビール店やカフェー店を直ぐさまその新しい造化の妙の場所に喜んで聞く人をもう一人や二人知ってないわけではありませんし。」

この例は今日都市を離れた少なくはないと地域がサファリランドやその他のいわゆる体験公園なる形態で大衆観光のために開発され、つまり損なわれているのを想起させるものでもあり、それ故、この作品で観光客用アトラクションのために地方の自然そのものが景観を含めて破壊されてゆくことに立ち向かって行く、つまり進歩の幸福感の陶酔に対抗する者をも登場させることをラーベが欠かしてはいないことは容易に理解できる。変わり者風のドゥリューディング（Driding）教授がその種の者で、ロートブルクを真の「町を荒廃させる者」（Poliorcetes）と呼び、谷の設計について「まったくフンメルバッハやウルバーシュタインに対しての言語遺断な振る舞いだ。この魅力的な横谷全体があの下司野郎に台無しにされてしまう。単なるそのような下らないベテラーの宣伝のために美観が損なわれてしまうのだ」と言う。この教授の抵抗は無論無益に終わるところに反語的な批判があることは言うまでもない。

地方地域でそれまで長い間維持されてきた態態を破壊しながら永久に消滅させてしまうものに新しい交通路がある。小説『古巣』（Alte Nester, 1879）の例とすれば語り手ラングロイター（Langreuter）は青少年時代を楽しく過ごした「生成の域」（Schloß Werden）を長年の後に再び訪れるが、すっかり変わった周囲の様子を目に次のような感慨を漏らすのである。

「新しい幹線道路が私の胡桃の樹があった場所をずっと貫いて通っている。だから今もなくこの道路の上方にも鉄道の築堤ができて、やがてライン河方面へ行き来する客車や貨車がこの場所を轟音を立ててあればは喘ぐようにして通り過ぎるようになるだろう。」

とくにしばしばそして力を込めてラーベが描いているのは進行してゆく工業化により河川に起こる変化が惹起する深刻な結果である。繰り返して批判の矢が向けられるのはまず当時いたるところで着手された河川の改修に対してであり、例としてはヴェーザー川の支流で「3人の令嬢に警われる」ライネ川（die Leine）、イーメ川（die Ilm）それにおインネルステ川（die Innerste）がはじめに挙げられる。この三つの川には19世紀に改修工事がなされたが、小説『インネルステ川』では「そのことでこれらの川は決して前よりも貧弱ではなかった」（7）と述べられている。また小説『アーブー・テルファン』（Abu Telfan, 1887）では「悪魔を一つ、19世紀を一連れて来て、鮮に悲惨な事を与えた」小川が描かれている。この小川は「はるか上流でその水を使い果たしてしまう巨大な新しい工場に飲み込まれてしまうお
り」[38]、その上流では

「川の水は素早く水車に押し込まれ、さらにフル回転する人工の機械で高いところへ引き上げられ、人間の意志次第で下へ落とされた。水はその自然の川床から地上や地下で人工の水路へと押しられ、汚れた忌まわしい姿となって澄んだ清らかな川を置き去りにしなくてはならなかった。」[39]

何物にも妨げられない自然の川の流れはラーベにとって特別な一筆に値するものでもあった。先に挙げた「巨匠アウトール」では過度に営まれるようになった林業に対する批判をめぐって「模範となる森の中をさらにと音を立てて流れることのできる恵みが上級営林局によってまだ奪われてなかった渓流」[40]が批評されている。

ここでもう一度銘記されねばならないのは、ラーベがこれら的事を聞なくとも150年にもなると前熱をいただいてあるのである。今日でも依然として河川は仮想なくしてしばしば意味もなく管が入れられ、川床が変えられ、水路変更工事がなされており、これらの河川工事あるいは下水工事が地下水面や地盤の沈下あるいは洪水の速度や破壊力の増大を招いていて、新たな川床や排水路等の対策工事が加えられねばならないことがあるのにはある意味でいわばグロテスクとも言うべき印象さえ受けざるを得ない。

ラーベが慧眼にも河川の汚染をもすでに工業化によって惹き起こされる問題として捉え、作品に定着させているのは従ってもはや驚くには当たらないだろう。インネレステ川の場合はその水源から河口にいたるまで次第に増大してゆく工場による汚染を同名の作品ではまだ異化され、またいわば話の余所たる導入部でのみ述べているのに対して、1883年の『フィスナーの水車小屋』は工場廃水による環境汚染を鶴最ものがん小説にならしめている。この作品ではラーベの時代に数多い町村に出現したような製糖工場の廃水が一つの川を汚染し、その川に長年存じしてきた飲食店兼製粉業を営業停止に追い込む様子がプロットの背景をなしており、語り手は川の死を次のような言葉で表している。

「数年前から毎年秋になると魚たちが水車用水路で生活条件の変化に対する不満を感じ始めていたのだ。魚たちは物を言わないで、1匹また1匹と、あるいはまた集団となって銀の鱗のある腹を上に向けてこの小川の水面を静かに流れ下って行ったのだが、人々はこれに関しても自分の意見をあらわれ言いうだけだった。そんな時私は、土曜日の午後木の葉散るさ中この水車小屋に目を注ぎつつ草とやってきて、年老いた父が嘆きにまた不機嫌に細い灰色の巻き毛の上で白い粉屋の帽子をあちこちと押しやりながら自分の釣り竿に立っているのを見つけると、いつも嘆けば今は亡き父親自身の意見をとくに願みしていたのだった。
W・ラーベと環境問題（諸説）

『さあ、あれをああ見てみろ、哀れな光景ではないか。』
うれしい気持ちで見られるようなものではなかった。すべて清々しく澄み切ったものの権化としての様子に私の少年時代や青年時代の最初の数年の間中ずっとさらさらという音を聞くながら流れていた清あたかも川が、のらのと這い回るような、悪臭を放つねばねばした青白い怪物に変ってしまっていたのだ。それは実際誰ももとは生き生きしていて清らかな姿として役立つような物ではなかった。ねとねとした糸のような物が川から手の届く岸の茂みの幹に、そして水面にまで垂れ下がっている柳の枝に掛かっていたのだ。華はとくに気持の悪くなるような姿を晒していた。しかしこの点で言えば多くのことに耐えられ
た鴨たちさえこの季節ともなればいつも双方の主要な生活要素に関して私らの感情を分から合っているようだった。鴨たちはもかかわした気持ちで彼のまわりを囲み、憂鬱そうに彼のいるところから水車用水路を眺め、小声でガーガーガ鳴きながら彼と同じようにため息をついているようだった。
『1週間毎に酷くなって行くんだ、そして勿論毎にでもな！』21)

このように生息空間の破壊、あるいは今日のいわゆるビオトープの破壊をもラーベは描く
が、それは専ら工業によるものばかりではない。益々集約的に営まれるようになった農業によ
っても行われ得ることを暗示する一例を小説『シュトゥップクーヘン』（Stopfkuchen, 1891）が
挙げている。語り手エードゥアルト（Eduard）が数十年の外国暮らしの後昔の友人シェゥマ
ン（Schaumann）を訪ねようと『赤砦』（die Rote Schanze）に向かう途中かつて青年時代に騒
染んだ野道を歩いて行きてながらとくに次のような変化に気づくのである。

「振り返っていろうと思ってみればあそこには以前赤砦へ通じている道の右側に約4な
いし5アールのある池あるいは本当は沼だったものがあったんだ。それが今はない。
以前はあらゆる神秘的にうごめている不思議な生き物たちで充ち溢れていたんだが、あ
れが今は1区画の多少とも実りのあるようなジャガイモ畑になっている。それがそんなに
有益であっても以前の方が美しかったし、より教化的でもあった。このルールケン
（Lurken）池には、僕が不審の念を抱いて捜し求め、そしてその後でないのに気づいて悲
しい気持ちになるのを要求する完全な権利があったのだ。そのような良き知人であっ
し、否、親友であった。菖蒲や葦やテッポウウグサが生い茂り、ヒキガエルやカタツムリや
ケンギロウが無数にいて、トンボが飛び回り、蝶がひらひらと舞い飛び、周りが柳に取り
締まれ、そしてよい匂いがしていた。 [...] 分からないが、あったところに残しておけた
だろうに。あの頃のままに残しておくべきだったろうに。家畜あるいはあの人たち自身の
ための数袋のジャガイモを重視する必要はなかったろうに。でもそれがあの人たちには重
要だったのだな。」22)
これも現今のいわゆる湿原あるいは湿地のピオートープとその破壊が先取りされていると解釈され得よう。たとえば単式栽培が問題とされ、農業生産量が次第に増大し、過剰生産が国家の要請で差し止められる一方で、さらなる土地利用を作り出すために相変わらず干拓や埋め立てが行われている今日になってはじめて知られ得るある種の先見性をラーベはこの点でも示していると言えようか。しかしこのピオートープの破壊もこの作家にあってはすでに述べたように人間生活の直接的な脅威を象徴しているものなのであり、植物や動物が死に瀕あるいは死滅しているところでは人間の、なかなかずく人間にふさわしい生活は存続しがたいものだという認識を言い換えているもの以外ならないである。

(3)

これまで引用したきた環境問題の諸例からみてもラーベがそのテーマの扱い方においてもいかにアクチュアルであるかが、示されているといい得であろう。なぜなら今日より先の未来も工業化のさらに進んだ環境のなかで展開するであろうからであり、いわゆる「自然に帰れ」ということはもはや不可能であるからである。そのことはこの作家も十分知っていたし、そのこと自体を変えようとしたのではない。大都市のアパートで暮しながらただ技術化とそれにによる経済的成長のみを頼りとして進歩のみを楽観的に信ずる当時の風潮に詩人らしく大きな不安を感じていたのである。そして現今の状態をも次のように予測し、それに対して警告を発していたのであった。

「この状態がこのまま続いてゆけば、人間は20世紀終わりには創造の第5日目とわれわれの主なる神が創られた動物たちの大きな園とをまさに疑いもなく自らの判断で実際的に対決してしまうことになる。しかしこうすれば神の子らの自然史なるものは19世紀初頭のその種絵とともに書誌学的な宝物となるであろう。」

ほぼ1世紀も前になされたこの予言は今日の状態を言い当てていると言って差し支えなく、この作家の先見性を十分にうかがわせるものである。なぜなら、今日国際自然保護連合をはじめ各国が公表しているいわゆる『レッド・データ・ブック』がまさにそれを見通しており、そのドイツ版たる『赤色リスト』(Rote Liste)に依っても全体として約30%の動植物が絶滅しているあるいは死滅の危機にあることが表現されているからである。前掲インネルステ川も1970年代にはすでに生物学的には死の川であったという。もし生態系の消滅を示す時計が存在するとすれば、その針はすでにあと5分を余すのみの時間を指し示しているに違いない。いわゆる産業革命もすでに第4期を迎えている今日ラーベの作品は注目されてよいであろう。また一方でこの作家はその警告を通じて、人類が招き寄せた幽霊とも言うべき工業化から逃れる術
W・ラーベと環境問題（諸説）

はないと強く認識させようとしているのである。従ってラーベが環境問題を取り上げる場合でも中心となるテーマは、工業化あるいは技術化時代にあっても個人がいかにして本来的な人間として存続できるかという問いにある。ラーベがその解答を示しているとは決して言い難い。むしろその問いを開示し、一人ひとりの読者に解決を求めていると言えるのである。このように古典的な解決を許さない点においてもラーベ文学の現代にも通ずる作品構成を認めようとするのはいささか手前味噌に過ぎようか。

注

1）川名英之：『こうして森と緑は守られた－自然保護と環境の国ドイツ』東京（三修社）1999 7ページ
3）Helmers, Hermann: Raabe in neuer Sicht. Stuttgart 1968, S.10

以後この全集はBAと略記し、引用は巻数とページ数のみで表記。 
6）BA Bd 1, S.166
7）BA Bd.6, S.202
8）BA Bd.11, S.82
9）, 10) BA Bd.11, S.76-77
11）, 12）BA Bd.16, S.34
13）BA Bd.20, S.213
14）, 15) BA Bd.15, S.31
16）BA Bd.14, S.36
17）BA Bd.12, S.103
18）BA Bd.7, S.64ff
19）BA Bd.7, S.351
20）BA Bd.11, S.12
21）BA Bd.16, S.52f
22）BA Bd.18, S.31f
23）BA Bd.20, S.23